

## 新型コロナを考える

新型コロナは全世界、日本全国、わが大阪の地を揺るがしている。パリ在住の作家・辻仁成さんによる朝日新聞 4月 22日 寄稿に注目した。「人類から愛奪う悪魔 外出制限解けても 試練と回復の道長く」と大きな見出し。抜粋して紹介したい。

実は、新型コロナウイルスの脅威は感染力の強さや致死率の高さだけではない。このウイルスには人間を分断させる恐ろしい副作用がある。人と人を引き離す、人と人の関係を断ち切るもう一つの破壊力も忘れてはならない。このウイルスの登場で、人々は社会的距離を強いられ、握手もハグも出来なくなった。全人類の半数にあたる人々が封鎖措置の中に置かれ、移動の制限や人との接触を禁じられている。



致死率の高さも恐ろしいがそれよりもっと怖いのが、これまでの人間の価値観や人間の結びつきを引き裂くこのウイルスの真の毒性だ。そのせいで日常は奪われ、人々は春だというのに友人や家族に会いに行けず、遊びに行くこと、集会に参加すること、いつものように働くことさえ出来なくなった。コンサート会場やサッカースタジアムで歓声を張り上げることや、集まって誕生日を祝うこと、葬儀に参列しお別れの言葉を手向けることさえ出来なくなった。ありとあらゆる人間的な営み、社会関係、精神活動、日常の行動が制限されてしまったのだ。

人類は大昔に石の道具を發明し人と人が結びついて集落を作った。時間の概念や貨幣という価値尺度を生み出し、利益を求めて人が集まり都市や国家が誕生し、まさに人間が結びついてこのような世界が出来上がった。経済は人間と人間を繋ぐことで回り、人々が行き交うことで拡大した。ところが新型コロナの出現はぼくたち人類の価値観を根本から変えてしまうことになる。世界中のあらゆる場所で人間が人間に近づけなくなり、ビジネスが滞るようになった。人と人の接触ができなくなって、その結果、経済が動かなくなり、失速しはじめた。覇権を争う米中はお互いを非難し、イデオロギー、宗教、文化の場で人々がいがみ合い、他者を排斥し、感染者が差別され、世界中が鎖国のような状態になって、不安と憎しみが助長され、ぼくらは誰もが距離をとるようになり、その結果、笑顔が遠ざかった。

全世界が力を結集させ、なんらかの新しい方法で、再び手を取り合って世界を創造していかなければならないというのに、新型コロナウイルスは想像以上に厄介で、ぼくらはどんどん引き裂かれていく。その上、封じ込めるための治療薬もワクチンさえも無い。人が離れていけばいくほど、人間は孤独になる。つまり、このウイルスは人類から人間の本質である愛を奪う悪魔と言い換えることもできる。

(2020年4月27日)